

未然に防ごう病害虫の侵入「ジャガイモシストセンチュウ」

ジャガイモ栽培で恐れられている病害虫の一つに「ジャガイモシストセンチュウ」があります。この病害虫は、根本的な防除対策が未だ確立されていない難防除害虫です。本町への侵入を未然に防ぐため正しく理解し、対策を徹底しましょう。

◇ジャガイモシストセンチュウとは◇

ジャガイモの根に寄生するセンチュウで、土中に存在し、10年以上も生き続けます。

大きさが0.4〜0.8ミリの硬い袋（シスト）の中に500個以上の卵が入っています。シ



↑ジャガイモの根に付着したシスト

ストの中の卵は、ジャガイモの根から出るふ化促進物質により、ふ化が進みシストを破って土中に拡散し、ジャガイモの根に寄生します。

◇被害の様子◇

根に寄生したセンチュウは、根の内部に侵入し、維管束（水の通り道）を塞ぐことで水分の供給を遮断します。これにより茎や葉にしおれが発生します。寄生する数が多いと株の枯死が連続して発生し、大幅な減収になります。

卵を含んだシストは、土中に半永久的に残るため、長期間休作した後も被害が発生します。

国内では、昭和47年、北海道で初めて確認されました。その後、長崎県、青森県、三重県で

確認され、平成23年には熊本県天草市でも確認されました。発生確認後さまざまな対策がとられているにもかかわらず、発生面積は年々拡大しています。

◇侵入防止対策◇

① 持込防止

発生地域の土壌からの持ち込みは主に種苗（未検査の種いも）の他、作業機械や車両、長靴などに付着した土壌などが想定されます。発生地域で利用した作業機械や運搬車両の使用を避け、靴などへの付着にも細心の注意を払いましょう。

種いもは、必ず検査されたものを使いましょう。青果用のジャガイモを種いもに使ったり、県外の物産館や直売所などで購入したジャガイモを種いもに利用することは絶対にやめましょう。

② 早期発見

シストセンチュウは、ほ場に入後、急激に増え続け、5〜6年後には100万匹になるとも言われています。1年でも早

く発見し、被害の発生と他ほ場への伝染を防ぎましょう。

ほ場での発見のポイントは、ジャガイモが肥大する時期の下葉の黄化や早期のしおれです。生育期後半は、観察をこまめに行い、異常が見られた場合は早めにJ Aや役場などに連絡してください。

③ 抵抗性品種の活用

ジャガイモには、このセンチュウに対する抵抗性を持った「抵抗性品種」があります。これは、侵入したセンチュウのまわりの細胞を死滅させることにより、周辺細胞からの養分供給を遮断することでセンチュウを飢え死にさせる効果があります。

未発生時から抵抗性品種を栽培することで、万が一の侵入時にも急激な密度上昇を防ぐ効果があります。

◎問い合わせ先

役場農林課農政係
☎（88）5670 「直通」

青果用の主な抵抗性品種
「キタアカリ」、「とうや」、「普賢丸」、「春あかり」、「アイユタカ」、「ピルカ」など



↑しおれが発生した土壌